

〈資料紹介〉 名古屋城三の丸遺跡の旧石器

都築暢也

1. はじめに

名古屋城三の丸遺跡は、戦国期の那古野城に関わる遺構や近世名古屋城の上級家臣団の屋敷地として著名な遺跡である。また、近世の大規模な整地層下で弥生時代から古墳時代の住居跡が検出され、複合遺跡であることも明らかになっている。

愛知県教育委員会や財愛知県埋蔵文化財センター（以下、センター）、名古屋市教育委員会の数次にわたる発掘調査では、当初から旧石器の存在が予想され、事実、センターの行なった県合同庁舎地点では、細石刃核が出土している⁽¹⁾。

今回紹介する石器は、新文化会館（県図書館）地点から出土したが、報告書掲載⁽²⁾から漏れたものである。

2. 出土層位

今回報告する石器は、いずれも弥生期以後の遺構掘削に伴って出土している。1はSK102埋土、2はSZ02東、3は近世の整地層からそれぞれ出土しており、残念ながら原位置を保っているとは考えられない。

名古屋城三の丸遺跡の所在する名古屋台地は、洪積世後期に堆積した土砂が隆起して段丘化したものといわれる⁽³⁾。この「熱田層」と呼ばれる黄褐色のシルト・粘土で構成される洪積層の上部には、有機化による（淡）褐色を呈する漸移層が形成され、上記の細石刃核がこの層から出土したことを考慮すると、これらの石器もこの漸移層から出土した可能性が高い。

3. 出土遺物

1は、長さ10.6cm、幅7.4cm、厚さ3.8cm、重さ156.1gで、溶結凝灰岩を石材⁽⁴⁾としているが、外面の風化が著しく進んでいる。外形は尖頭器状を呈し、表面中央には縦に一条の稜が走る。断面は部厚い三角形をなす。表面右側には大きな剥離面を残し、先端部を除く側縁には裏面の主剥離面か

らの調整剥離が行なわれている。表面左側では3回以上の剥離を加えた後、同じく裏面からの調整を先端部から基部までの縁辺部に細かく行なっている。裏面には3面の横方向からの大小の剥離面を残し、先端部と基部右側に不規則な調整剥離を行なっている。

2は、長さ3.4cm、幅2.3cm、厚さ0.8cm、重さ7.2gを測り、石材はチャートである。裏面の一部に自然面を残し、裏面からの粗い調整剥離を行なっている。小型尖頭器か削器の未製品と考えられる。

3は、長さ4.0cm、幅2.3cm、重さ27.8gを測る黒曜石製の石核である。

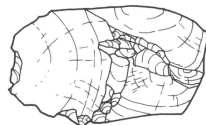
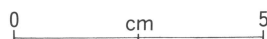
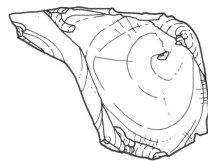
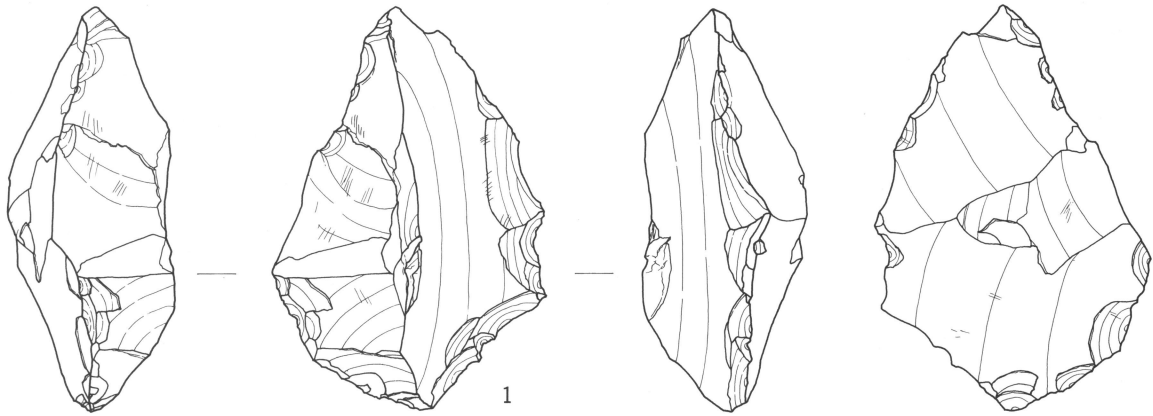
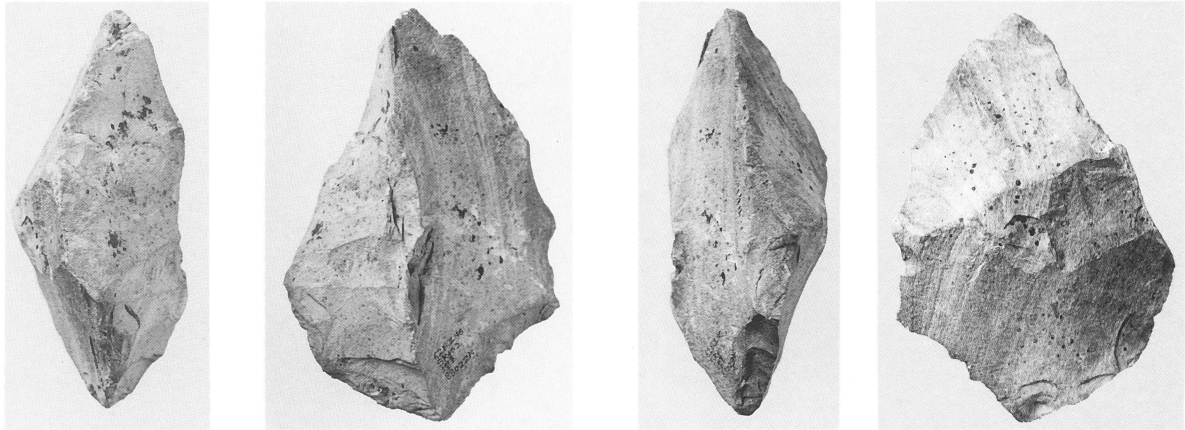
4. 小結

原位置を保たず、出土層位も明らかでないにもかかわらず、結論を急ぐのは余りに大胆であるが、注目すべきは、1の尖頭器様石器である。石核の可能性もあるが、側縁に不規則ではあるが調整剥離が施されていることをみれば、搔（削）器と考えてよいであろう。さらに、横位に剥離された素材を用いていること、断面が部厚い三角形を呈し舟底状の稜を有すること、裏面はほとんど未加工であることなど角錐状石器との共通点が認められる。ただし、角錐状石器の多くが長さ4～7cmほどの小型の石器で細身の形状を示すのに対し、この石器は10cm以上とかなり大型で幅広である点が大きく異なる。この尖頭器様石器の類例は極めて乏しく、小型品ではあるが、千葉県の大袋小谷津遺跡で角錐状石器を伴って1例認められる⁽⁵⁾。

三の丸遺跡から2km南に位置する名古屋台地上の竪三蔵通遺跡からはナイフ形石器が出土し、笠寺台地上の見晴台遺跡では角錐状石器が1点出土している⁽⁶⁾。これらのことを考え合わせると、今回紹介した石器は、尖頭器出現以前の後期旧石器時代後半期前葉のナイフ形石器文化に由来するものとしておきたい。

- 註(1) 梅本博志編 1990 『名古屋城三の丸遺跡 (II)』
 勸愛知県埋蔵文化財センター
- (2) 梅本博志編 1990 『名古屋城三の丸遺跡 (I)』
 勸愛知県埋蔵文化財センター
- (3) 井関弘太郎 1977 「一宮の地形と地質」『新編 一宮市史 本文編 上』
- (4) 以下、石材鑑定は、当センターの堀木真美子による。

- (5) 酒井弘志他 1994 『千葉県成田市公津東遺跡群』
 成田市公津東土地区画整理組合・勸印旛郡市文化財センター
- (6) 川合剛 1993 「見晴台の旧石器」『名古屋市見晴台考古資料館報 みはらし No.165』 名古屋市見晴台考古資料館
- 謝辞 小論を記すにあたり、大参義一・加藤安信両氏には多くのご教示を得た。



名古屋城三の丸遺跡出土の旧石器